

## 言いあやまり研究に関する一考察

—— 言語理論に基づいて ——

柳 京子

### はじめに

言いあやまり研究は比較的新しい研究領域とみられる。この研究領域が本格的に成立したのは、1970年代にはいつてからである。神尾・外池（1979<sup>注1</sup>）によると、最近の言いあやまり研究は主として次の二つの目標をめぐる行われてきている。その第一は、発話のメカニズムを解明する手がかりを得ることである。さらに、言語理論—もしくは文法—において重要な役割を演じている概念は、いずれも言語構造の分析から見出されたものであるが、その第二は、言いあやまり研究が言語理論にとって重要な意義を持つことと深い関連性をもつものである。

神尾らも述べているように、言いあやまり研究を全体的にとらえ、言いあやまりの本質を探るために解明作業を進めていくことは非常に重要であると思われる。Mackay, D. G（1980<sup>注2</sup>）は、将来における言いあやまりの研究課程を、1) observational refinement <観測の精練>（言いあやまりがどのように収集され、分析されるかについて改良する方法）、2) experimentation <実験>（言いあやまりの性質に関する仮説、実験を試みる方法）、3) theoretical integration <理論の統合>（言いあやまりの理論を拡充し統合して、改良する方法）という三つの方向に整理して示している。本論文では、前回における言いあやまりの先行研究の流れの検討に続くものとして、さらに言いあやまり理論の統合研究の一つの作業として、言語理論に基づいての言いあやまり研究に関する考察を進めていく。

また、本論文では、言いあやまり研究の最も基本的な予備段階として、まず、何が対照言語学的にみて、言いあやまりと定義されるべきかについて明確にしていくことを課題とする。

そこで、本論文では、Shattuck, Boomer and Laver といった言いあやまり研究の先駆者たちが用いた定義をふまえた上で、言いあやまりの概念に関する規定を考えてみることにする。

さらに、言語の本質を解明しようとする一つの手がかりとして、言いあやまり研究の中で非常に重要視されてきた言語理論の関係項目の一つである、Competence と Performance の問題にその焦点をあわせて検討を加えていく。

### 言いあやまりの概念

今まで行われてきた言いあやまり研究の大部分は母語の中で起こる言いあやまりに関するものであり、外国語の中で起こる言いあやまりに関するものではなかった。とくに、対照言語学的な観点からの言いあやまり研究は例がないようである。ここでは、対照言語学的な立場（お

もに母語の中で起こる言いあやまりではなく、外国語の中で起こる言いあやまり)への展望に立って言いあやまりの概念をとらえ、検討を加えていくことにする。

まず、言いあやまりとは何かに関する定義から出発したいと思う。これまでに多くの言語学者や心理学者などによって、いろいろな言いあやまりに関する定義がなされてきたが、まず、Shattuck, s (1965)<sup>注4)</sup>は、次のように述べている。

'The criterion was this : instance in the spoken output of normal adult native speaker of English which were perceived as departures from intention, either by the speaker, by the listener, or by both.'

これはおもに母語の中で起こる言いあやまりの立場であり、とくに心理学的な面を重視したものであると言える。

さらに、神尾・外池(1979)<sup>注5)</sup>も、「言い間違い」<sup>注6)</sup>は正常な話し手が時折把す一時的ないしは瞬間的なことばの誤まりであり、本人が気付けば、すぐにも訂正することのできる誤行動であるというように述べ、Shattuckと同じ立場をとっている。

しかし、このような立場に対してBoomer and Laver (1973)<sup>注7)</sup>は、言いあやまりの定義を次のように行っている。

'A SLIP OF THE TONGUE (hereinafter SLIP), IS AN INVOLUNTARY DEVIATION IN PERFORMANCE FROM THE SPEAKER'S CURRENT PHONOLOGICAL, GRAMMATICAL OR LEXICAL INTENTION.'

これは、おもに外国語の中で起こる言いあやまりをとらえる立場であり、とくに心理学的な面より言語学的な面を重視したものである。

また、Meringer, R と、Mayer, K. (1895)<sup>注8)</sup>は、言いあやまりには一定の法則があることから推察して、「単語ないしは文章を構成する音の一つ一つ、あるいは単語そのものを極めて特殊な方法で相互に結びつけるある種の精神的なメカニズム」が存在すると断定して差支えないと考えた。

以下、Boomer and Laver,そしてMeringerとMayerの言いあやまりの概念の立場に即して考察を進めていくことにしたい。

### Competence と Performance

言語能力は獲得していても、言語による伝達活動を行うことができるとは限らない。つまり、言語能力と伝達能力とは相互に独立的なものであるという議論は果たして有効であるかということである。

文を作る能力は言語能力の主要な部分を構成するものであるが、文の場面、適合性を判断する能力のほうは伝達能力に属するものであり、したがって、言語学の研究対象にはなり得ないというような議論は有効であるだろうか。それは、言いあやまりを分析した研究の多くが、文法研究の立場から提案された言語学的な単位や概念が言語運用のレベルにおいて実在するかどうかの検証を目的としていることによく表れている。

Chomsky, N. (1965)<sup>注9)</sup> は、' We thus make a fundamental between competence < the speaker hearer's knowledge of his language > and performance < the actual use language in concrete situations >' と述べている。このような Chomsky の linguistic competence (言語能力) と linguistic performance (言語運用) とを峻別する仮説は、言いやまりを扱った論文の立場に明確に反映されている。

言いやまりは performance (言語運用) のレベルにおける現象であるから、その competence (言語能力) の理論における証拠としての重要性については疑問がなげかけられる。

さらに、Chomsky and Hale (1968)<sup>注10)</sup> は、言語のこれらの二つの基礎概念の間に鋭い分割を行っている。

' the performance of the speaker or hearer is a complex matter that involves many factors. One factor involved in the speaker — hearer's performance is the knowledge of the grammar that determines an intrinsic connection of sound and meaning for each sentence. we refer to this knowledge — for the most part, obviously, unconscious knowledge — as the speaker — hearer's "competence". Competence, in this sense, is not to be confused with performance. Performance, that is, what the speaker—hearer's actually does, it based not only on his knowledge of the language, but on many other factors as well — factors such as memory restriction, in attention, distraction, nonlinguistic knowledge and beliefs, and so on. We may, if we like, think of the study of competence as the study of potential performance of an idealized speaker — hearer's who is unaffected by such grammatically irrelevant factors.'

このように強く「competence/performance」の区別を支持する人々は、話し手の competence の十分なモデルが、performance のモデルの考慮されるまえに、有効にならなければならないということを主張する。この点で Langacker, R. (1967)<sup>注11)</sup> の提言は興味深い。彼によると、言語学者は言語の performance よりもむしろ言語の competence を説明しようとする。それは言語の performance に興味がないということではない。しかし、言語の competence への関心がとくに強い理由は、全く単純に言語の competence の説明が論理的に言語の performance のそれに先立っているということである。どんな言語の performance に対する適切な説明も抽象的な言語体系の適切な説明を前提とするが、その逆は真ではないのである。

また、corder (1981)<sup>注12)</sup> は、performance errors を unsystematic, competence errors を systematic であると述べ、学習者の言いやまりは、学習者が学習段階において目標言語に対して持っている transitional competence (過度的能力) をうかがわせる資料であるとして、言いやまりの重要性を強調している。そして、corder (1971)<sup>注13)</sup> は、言いやまりという概念を前面に出して、学習者言語研究の新しい理論化を試みている。ここで、corder は、この不安定で過度的な性格を持つ言語に Selinker, L (1969)<sup>注14)</sup> の Interlanguage (中間言語) という術語を与え、それを母語から目標言語に至る中間の場所に、両者に交差した部分を残す独自の言語体系と

して位置づけている。

そして、Selinker (1972)<sup>注15)</sup>は、Interlanguage (中間言語) 研究の取り扱うべき問題点についてかなり包括的に整理している。ここで、Selinker は、中間言語研究の中心的概念となる化石化現象 (fossilization) について述べている。化石化現象とは、すでに根絶したと思われていた言いあやまりが、種々の場面 (話者が難解な内容に注意を集中させていたり、不安、興奮、超リラックスの状態にあるときなどにおける場面)<sup>注16)</sup>で再現する現象を指している。このような言いあやまりの規則的な再現は、Selinker (1972) によると、潜在的な心理構造 (latent psychological structure) の中に存在するメカニズムによるものであり、化石化および中間言語の存在を仮定させる根拠となるものであるという。

言いあやまり研究の上で多大な貢献をなしたと評価されている Fromkin (1968)<sup>注17)</sup>は、competence と performance の相互関係について、performance の特定の面は、competence のそれほどたらしめなものであるとなく、予見不能なものでもないとして主張している。これは、もちろん performance のモデルが実際に人が言うことにもとづいていることや、言語活動の中で起こるかもしれない言いあやまりを人が予見できるということを示すのではなくて、むしろ言語の performance における二つの主要な面である production (生成) と perception (知覚) との両面において厳密な強制が認められるということの意味している。

performance のモデルは competence のモデルである文法をその一部に組み込んでおり、またその情報を利用するので、この意味において文法の研究は、performance モデルの研究に先行することになる。

Bever と Langendoen (1969)<sup>注18)</sup>も厳密な competence / performance の二分割に対して反論している。すなわち、英語文章構成論 (English syntax) で起きた歴史的な変化に言及して、その原因を探し出すためには、言語の competence 系と performance 系との間の相互作用を見なければいけないと主張している。彼らは、“perceptual strategy” (知覚方略) という概念を導入して、performance は competence から束縛を受けると同様にそれに束縛を与えると論じている。

音声学の適切な理論とみられるものは、はっきりした feature (素性) の結合として音の segment (分節) を見なければならぬということを示してきた。すなわち、segment (分節) は分解できないものではないとすればこのような独立した feature (素性) が現実の言語活動で特定の役割を果たすかどうかを知ることは興味深い。もし、ある言いあやまりが、直接的には全 segment (分節) を含むというより、むしろ features を含むということになるならば、これは features (素性) の存在の強力な証拠を示すことになるからである。

Mackay (1969)<sup>注19)</sup>は、feature (素性) がおそらく言いあやまりに際して、ある役割を果たしているであろうということは認めながらも、それはもっと大きな単位ほど重要なものではないと見なしており、そのことについて、次のように述べている。

… the fact that reversed phonemes were usually similar (except for place of articulation)

suggests that single features may be transposed in spoonerisms. But in no case in our data was feature reversal the only possible explanation of an error ..... these examples are extremely, rare, and other explanations are possible. For examples, these examples might represent partial fusions of phonemes in natural speech, a frequently occurring event in studies of delayed auditory feedback.

また、Fromkin (1971)<sup>注20)</sup>は、多くの言いあやまりが、'postulating that certain properties or features constitute independent elements in the production of spee.'によって説明されると述べ、segment (分節)と同様にfeature (素性)が知覚され、混同されるということを示す発話の知覚における観測プラス研究を確認することで、Features (素性)はCompetenceと同様にPerformanceにおいても重要であると結論している。

さらに、Fromkin, V. A. (1973)<sup>注21)</sup>によると、言いあやまりの現象は、言語の歴史的变化を探る上に重要な資料とされてきたが、最近では発話生産のメカニズムを探るうえでも重要な指標と考えられるようになってきた。このように言いあやまり研究は、言語の本質の解明に関わる領域として重視されてきた状況が把握される。

その後、さらに、Shattuck, H. S. (1975)<sup>注22)</sup>およびGarrett, M. F. (1975)<sup>注23)</sup>のような優れた研究が現れ、言いあやまり研究は理論的な面での発展の段階を迎えている。とくに、Garrett, M. F.の研究は発話のメカニズムに関する重要な仮説を提示した注目すべき労作である。それは、文法理論の検証を目的とするものというよりは、むしろ言いあやまり研究の内部で理論構築、批判、検討を行っていると思われるものであり、それを通して、言語学の一領域として発話メカニズム解明のための場が設定され、そこでの議論が開始されたとみるべきであろう。

#### おわりに

以上、言いあやまり理論の統合研究の一つの作業として、言語理論に基づいての言いあやまり研究に関する考察を行ってきた。すなわち、対照言語学的な観点に立つ方向と言語の本質を解明するための一つの手がかりを得る方向とを志向しながら、言いあやまり研究の中で、非常に重要視されてきた言語理論上の問題の一つである、competence と performance との関係論を中心に検討してきた。

言いあやまり研究をめぐる言語理論の問題は多領域にまたがったものであり、幅が広く、奥も深い。本論文では、その一部を扱ってきたにすぎない。

しかし、言いあやまりは決して無秩序に生ずるものではなく、言語の構造と本質に従って生ずるものであることは明示してきた。

言いあやまりの組織的な分析と発話のメカニズムの研究、とくに日本語を資料としたものは、ようやくその緒についたばかりであり、他の言語についても、Garrett, M. F.の研究を越えるものはまだみられず、また他の面からの approach もきわめて僅かな成果しか生み出していない状況である。

したがって、今後の中心的課題としては、言いあやまりの実験の積み重ね、すなわち performance のデータの積み重ねによって、言語活動の基底にある competence に関してのより深い理論に到達できるという可能性を示すことが考えられる。

また、本論文の中で少し触れたが、言いあやまり研究の中での Interlanguage (中間言語) の設定の問題について、母国語の獲得の過程と外国語教育との関連をどのようにとらえるべきかについても、今後の一つの課題にしたい。

〔注〕

- 1) 神尾昭雄, 外池滋生 <1979> 「言い間違いの言語学」今井邦彦編 『言語障害と言語理論』 p. 275 大修館書店
- 2) Mackay, D. G. <1980> Speech Errors : Retrospect and prospect, In V. A. Fromkin <ed> <1980> Errors in Linguistic Performance p. 319 Academic Press.
- 3) 「言いあやまり研究の位置づけ — 主に対照言語学的な観点から —」 『人文科教育研究 14』 1987
- 4) Shattuck, S <1965> 'Speech errors and sentence production' p. 12 ph. D Dissertation M. I. T.
- 5) 注 1 と同書 p. 272
- 6) 本論文では「言い間違い」と「言いあやまり」を同じ概念としてとらえ、広い意味で使っている。ここでは、英語の speech errors の訳語として「言いあやまり」を位置づけている。
- 7) Boomer, D. S. and Laver, J. D. M <1968> slips of the tongue. British Journal of Disorders of communication, 3, p.4
- 8) Meringer, R. and Mayer, K. <1895> Versprechen und Verlesen. stuttgart: Goschensche Verlag. p. 10
- 9) Chomsky, N <1965> Aspects of the Theory of syntax, p. 4, M. I. T. press.
- 10) Chomsky, N and M. Halle <1968> The sound pattern of English. p. 3 New York : Harper and Row.
- 11) Langacker, R. W. <1967> Language and its structure. pp. 36-37 New-York: : Harper and Row.
- 12) Corder, S. P. <1981> Error Analysis and Interlanguage. p. 10 Oxford university press.
- 13) 注 12 と同様 pp. 10-11
- 14) Selinker. L <1969> Language transfer. General Linguistics, vol. 9 No 2:

pp. 67-92

- 15) Selinker, L. <1972> Interlanguage. IRAL, vol 10 No 3. pp. 209-231
- 16) 注15と同書. p. 36
- 17) Fromkin, V. A. <1968> Speculations on performance Models, J. of Ling. 4. pp. 47-68
- 18) Bever, T. and Langendoen <1969> The Interaction of speech perception and Grammatical structure in the Evolution of Language, paper presented at the UCLA Conference on Historical Linguistics.
- 19) Mackay, D. G. <1969> Spoonerisms : The structure of errors in the serial order of speech, Neuropsychologia. p. 12
- 20) Fromkin, V. A. <1971> Tips of the slung — or — to Err is Human, uncorrected version of a paper to appear in UCLA Working paper in phonetics.
- 21) Fromkin, V. A. <1973> Speech Errors as Linguistics Evidence. The Hague, Mouton.
- 22) Shattuck — Hunfnagel, S. <1975> Speech Errors as Linguistics Evidence. The Hague, Mouton.
- 23) Garrett, M. F. <1975> The analysis of sentence production. In G. Bower <ed. > The psychology of learning and motivation, Academic press.